

作家／「福聚寺」住職

玄侑 宗久さん

GENYU SOKYU

【げんゆう・そうきゅう】1956年、福島県三春町出身。慶応義塾大学中国文学科卒業。さまざまな仕事を経験したあと天龍寺専門道場に入門し、2008年、福聚寺第35世住職となる。2001年「中陰の花」で第125回芥川賞を受賞。「光の山」にて第64回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。「化蝶散華」「龍の棲む家」など小説をはじめ、仏教や禅にまつわるエッセイ、対談本も多い。2009年より花園大学文学部仏教学科客員教授、2011年より新潟薬科大学客員教授を務める他、福島県警通訳、妙心寺派東京禅センター理事など多方面で活躍している。

縁を開いた先にあった
「作家」と「僧侶」の二刀流



INTRODUCTION

43歳の時に発表した小説『水の舳先』が芥川賞候補となり、翌年『中陰の花』で芥川賞を受賞した玄侑宗久さん。以来、多くの作品を世に送り出し、数々の賞にも輝いている。禅や仏教の教えをユーモアを交えわかりやすく説くエッセイは、読者に新たな視点を与えてくれる。作家として活躍しながら、福島県三春町にある臨済宗の寺院「福聚寺」の住職として地域の人々と向き合う玄侑さんに、ご自身のライフストーリーとその思いをうかがった。



Author / Priest
GENYU SOKYU

——玄侑さんは禅寺の長男として生まれ、現在住職を務められています。子供の頃から跡継ぎになろうと思われていたのですか。

私は35代目の住職ですが、禅寺では血縁に関係なく弟子が継げばよいとされ、33代目までは血縁ではありません。私の父は初めて親の跡を継いだ住職で、私はこの寺で生まれた初めての子供でした。ですから、跡を継がなくていいという思いはありません。

とは言っても、やはり継いでほしいのだからとは感じていました。「跡継ぎになりたくない」という思いと「宗教って面白そうだな」という思いが、交錯していましたね。

——宗教への興味は持ちだったのですか。

小中学生の頃は、夏休みになると坐禅合宿に参加していました。そこから興味が湧いてきたんですけど、職業として僧侶はいかなものかという思いもあって複雑でした。

というのも、実家がお寺だから、学校では「坊主」とか気軽に呼ばれるわけです。そんな時、私はわざわざ坊主頭にして学校へ行き、皆の前でお経を唱えてみせ、笑い

を取っていました。そんなことをしているうちに、宗教への興味が増していきしましたが、一方では作家になりたいという思いも持っていました。

——なりた職業が二つあったのですか。

それは悩まれたでしょう。

高校生の時、ウチのお寺に来られたことが縁で、哲学者の星清先生と出会いました。星先生が東京で開かれていた読書会や坐禅会に参加する中で、宗教と文学、両方への興味がさらに深まっていくんですよ。とは言え、私はあれもこれもは許されない、どちらか一つを選ぶことが潔いのではないかと思い込んでいました。

どちらを選べばいいか悩んでいたある日、星先生から「そんなに悩むなら、両方やってみればいい」と言われたのです。ハッ

「そんなに悩むなら、
両方やってみればいい」

としましたね。その言葉に、私は地平線が広がっていくような感覚を覚えました。

——慶応義塾大学の中国文学科に進学されたわけですが、学生時代はどのように過ごされたのですか。

僧侶になるにしても、作家になるにしても、いずれできなくなるような経験を若いうちにしておきたいと考え、在学中からいろんな仕事をしていました。

——具体的には？

下宿の近くにあったおでん屋のアルバイトに始まり、東京湾の堤防をつくる建設現場で土木作業員として働いたり、海外留学する知人の代わりにナイトクラブのフロアマネージャーを任されたり、中国の生薬に関する百科事典の翻訳をしたり、英語教材のセールスマンをしたり、本当にいろんな

出版社が潰れるということもご縁だと思って 一旦離れたわけです

仕事を経験しましたね。コピーライターだった時には、私のつくったキャッチコピーが、写真フィルムメーカーのCMに使われたこともありましたよ。

——そんなキャリアをお持ちだったとは！

その中で一番長かったのは、大学卒業後に就いた埼玉県にあるごみ焼却施設での仕事です。クレーンを操縦してごみを焼却炉に運ぶのですが、3日に1回24時間という勤務体系は、執筆する時間が欲しかった私にとって好都合なはずでした。

ところが実際には、朝まで仕事をして帰宅すると、寝ずにはいられないんですよ。それで起きるともう夕方でしょ？ 夕方から朝まで書いて、次の日はそのまま出勤して24時間働く。仕事は面白かったんですけど、身体的にはかなりきつかったですね。

——執筆活動はいかがでしたか。

24歳の時に初めて書いた作品が大手出版社の新人文学賞で二次選考に残ったものの、デビューには至りませんでした。

そんな中、ある出版社に勤務していた友人が私の作品を編集長に見せたところ、「面白くないか。書いてみなさいよ」ということになりました。さっそく書いて出したのですが、「面白くないよ、4分の3までは。でも、最後の4分の1はどうしてこうなるの？ 文体が変わっているんだよね」と。そう言われても、当時の私には「文体」の意味するところがよくわかりませんでした。それでも苦しみながら3回書き直して、

「よし！ これで来月号に載せる」とゴーサインが出て間もなく、その出版社が倒産して、掲載の話も立ち消えとなりました。その時点で、私はこれが潮時かなと思い、僧侶になるため道場へ行こうと決めました。

——書くことをあきらめたのですか。

出版社が潰れるということもご縁だと思って、一旦離れたわけです。

——僧侶になるため、京都の天龍寺で修行されたそうですが、入門はすぐに受け入れてもらえたのですか。

志願者はまず「たのみましょう」と声を張り上げ、道場の玄関で頭を下げて座り込みます。すると僧侶がやって来て「出ていけ」と追い出されます。それでも引き下がらずに、再び座り込んで低頭する。これが2日間、続きます。それに耐えられたら、次は狭い部屋で3日間、坐禅を組み続けます。それが入門試験です。

——つらくなかったですか。

大声で「出ていけ」と言いながらも、声をひそめて「少し休憩してまた始めなさい」と言ってくれるのです。それに力づくで追い出そうとされても、座り込みで固まった体をほぐしてくれていると思えば、全然つらくありませんでした。

——ポジティブな捉え方ですね。

入門してからは、掃除、洗濯、読経、坐禅、托鉢、畑仕事、庭木の剪定などが日課でした。それらすべてが修行です。時には儀式もありますが、仲間も大勢いましたし、特に大変だ

とは思いませんでした。納得できないままやらされていけば、苦痛だったかもしれないけど。

——3年間の修行を無事に終え、ご実家の禅寺で僧侶となられています。再び執筆活動を始めたきっかけは？

実家に戻って10年くらいは副住職という立場で、日々のお勤めだけでなく、お寺でのイベント開催にも精を出していました。宮沢賢治の朗読会と古楽器の演奏を組み合わせた、文楽を上演したり、有名なアメリカ人の尺八奏者を招いたり。

——どのイベントも面白そう！

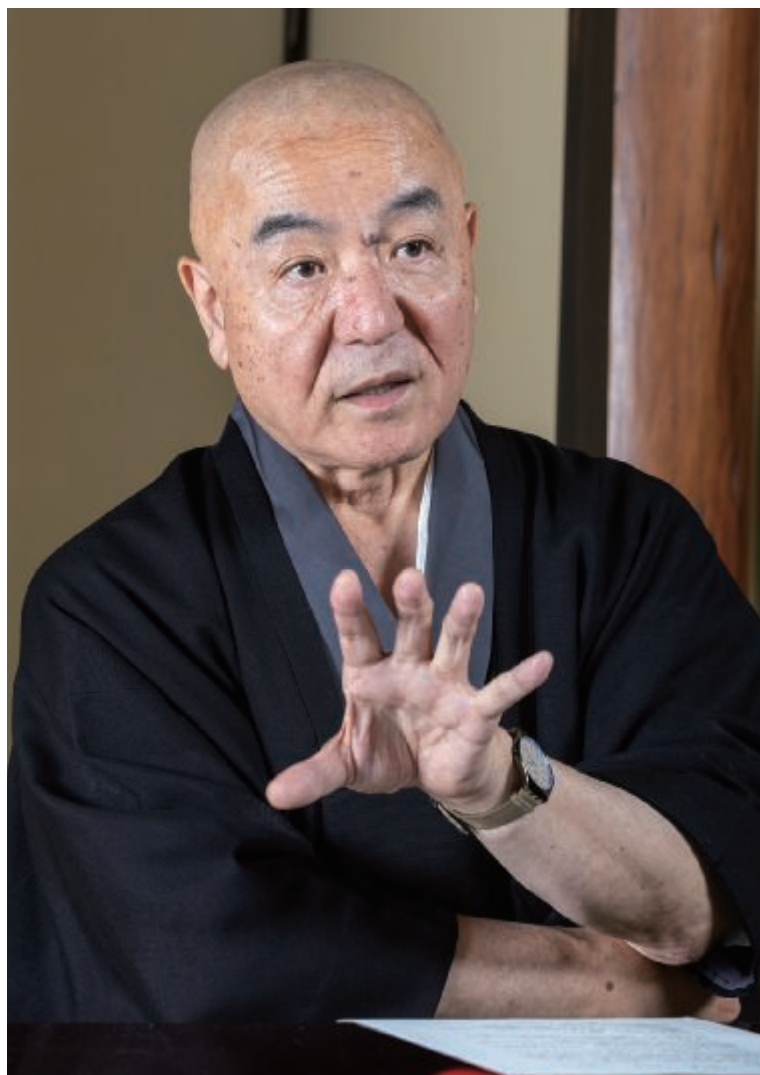
そのイベントのシナリオ制作は私の役目でしたが、作品として書いていたわけではありません。

私は俳句が文学ならば、戒名だって文学だろうと思っています。副住職としてお葬式を任された時は納得のいく戒名をつけようと思案していたのですが、中には「筋縄ではいかない、自分でもストンと落ちないケースがいくつか出てきました。それがきっかけで、また書き始めるようになりました。

——久しぶりに書いてみて、いかがでしたか。

20代の頃に指摘された「文体が途中で変わる」という意味が、「ああ、これだったのか」と理解できました。長年引っかかっていたところをすんなり通過できて、「何だ、書けるじゃないか」という気持ちになりました。

何度も壁にぶち当たってぶち抜く人もいますが、私は壁にぶち当たったら、その壁



に沿って歩きます。そして気づいたら、壁がなくなっているんです。時を経て筆を握ったら、文体の壁がなくなっていたのです。異なっていた二つのことが、実はどこかでつながっていたのかもしれない。他のことを鍛錬していたら、以前できなかったことがいつの間にかできるようになっていました。

——僧侶と作家に、何か共通する部分があったのでしょうか。

経典の読み込みも、仏教や禅の解説も、まずは言葉で追い求めるわけですから、宗教にとって文学は必要なものです。一方で、坐禅や瞑想、読経などの背後には無意識の

世界があつて、そこから文学上の答えが降りてくることもあります。

私の場合、小説を書く最高の喜びは、一番最後にやって来ます。朦朧とした意識のままでも文章がどんどん出てくる、自分はただ写し取っているだけという瞬間が訪れるのです。その快感を味わいたくて、書き出しから4分の3までの苦痛も耐えられるのだと思います。最初から結論まで見えていたら、私は多分、書かないでしょう。

——その快感が、坐禅や瞑想をしている時の快感と似ているのでしょうかね。

お経を上げている時の脳の血流を調べる

と、全体の血流がわずかに増すんですね。空がうつすらと雲に覆われているような、低電圧な感じですよ。そういう状態は稲妻が走りやすい、つまり直観が働きやすいのです。坐禅をしている時も、小説を書いていて佳境に入っている時も、そういう感覚があります。

それに対し、エッセイを書いたり講演で話をするような行為は完全にロジカルで、自分の中にあるものをアウトプットしている、いわば消費活動です。

——同じ「書く」という行為でも、使っている脳の部分が違うのかもしれませんが、では玄侑さんにとって「仕事」とは何でしょうか。

読んで字のごとく「事」に仕えることで、何か事が起こった時に、その場でベストな対応を尽くすことだと考えています。私は作家であると同時に僧侶であり、生活者でもありますから、ベストな対応が書くことではない場面も多くあります。むしろ行動することのほうがベストな対応になる場面が多いでしょう。

ただ、どんな行動であれ、目的意識を忘れて没頭し、そこで「遊ぶ」ことが大事だと思っています。仕事は遊びの場にしなければいけないと。

——「仕事を遊びの場に」ですか。仕事が好きじゃなければ、難しいのでは？

僧侶の仕事の一つにお葬式がありますが、誰かが亡くなったという連絡が入ると、毎回、気が重くなります。僧侶と言えども、

一見関係なく起こる出来事にも、ちゃんと目を向けられるかどうか



「死」は容易には受け入れがたいものです。お葬式にあたり、故人はどういう方だったのか、どのような人生を歩んで来られたのか、遺族からじっくり話を聞くんですね。どこで生まれ、どんな子供時代を過ごし、どんな仕事をして、どんな最期を迎えたのか。遺族の気持ちに寄り添いながら、亡くなられた方のライフストーリーを聞いているうちに、その物語に段々のめり込んでいきます。それをもとに戒名を考え、「引導香語」を書くのです。

「引導香語」とは？

故人を現世から仏の世界に送り出すための言葉で、お葬式の最後に唱えます。簡単に言えば、故人のライフストーリーを歌にするんですね。漢詩で書く人もいますが、

私は参列者にもわかりやすい言葉で書くようにしています。

戒名や引導香語ができたところで、晴れ晴れとして、仏の世界に送り出そうという気持ちになってくるんですけど、そこに至るまでは毎回、山に登るような感じですね。

——お葬式での言葉をそんな思いで書かれているとは、知りませんでした。そのような大変な面はあるにしても、若い頃、なりたかった二つの職業に就かれている今、ライフプランについてどう思われますか。

学校では計画を立てて目標に向かうという生き方だけを教えますが、人生で重要なことは計画通りに起こらないですよ。結婚も職業選択も、目標を定めて、そこにまっしぐらに向かつて成就したという人は稀です。大体ひょんなところから別の選択肢が出てきて、それが2回、3回と重なると、もう運命かなって思う。

死も正面からはやって来ません。正面を横切ることはあるけれど、たいてい斜め後ろからやって来る。それでトントンと肩を叩かれて、振り向くと死神がいる。「余命1カ月もないでしょう」と医師に宣告されても、人は「明日もきつと元気に起きるはず」と思って寝るんです。「明日、必ず死にます」と言われたら、きつと寝ないでしょう。ですから、目標を据えて、いかに近づいていくかという生き方では、死に対処できません。

——では、どうしたらいいのでしょうか？

子供はよく道草を食いますが、道草を食う

子供は食わない子供よりも認知判断能力が1.8倍高いという心理学の実験結果があります。初めに設定した目標は、仮のもではないだろうか。もしかすると、その目標より大事なものが道草の途中にあるかもしれない。その大事なものにハッと気づくことが、縁を開くのではないかと思います。

「縁」ですか。

縁とは正面に見えるものではなく、周りを囲んでいて目が行かないものです。仏教では「ご縁」という言い方をしますが、似たような意味に英語の「セレンディピティ」という言葉があります。要するに、目指していたものではないけれど、重要なものの出会いです。

求めているものとは一見関係なく起こる出来事にも、ちゃんと目を向けられるかどうか。そういう眼差しがあれば、大きな縁につながっていくと思うのです。一心不乱に目的だけを見つめていたら、目的に関係ないものは目に入らなくなるでしょう。

仏教では、良い出来事も悪い出来事も、すべて含めて「仕合わせ」すなわち受け身で対応しようと考えます。起こった出来事に対して、どう仕合わせられるか？ 人生のあらゆる出来事をありのままに受け入れ、うまく受け身が取れば、幸せが感じられるのではないかと思います。

——「仕合わせ」がカギなんですね。お話を聞かせていただき、ありがとございました。

(インタビュアー／ライター 更田沙良)